

慈濟 243

慈濟基金會
2017 年 3 月

ものがたり

TZU CHI ● ツーチャー



表見返し●

文・證嚴法師/訳・済運/撮影・李白士

水が大地を濡らし 法が心田を潤す

大地に雨水は欠かせない

雨は草木を灌漑し

苗に水分を与える

万物が等しく生命を

維持することができる

人心に法水はなくてはならない

法で心田を潤せば

善の苗が芽生え

悟りが多ければ

智慧が深く根ざす





ザータリ難民キャンプ周辺のテント区は物資が乏しく、生活はキャンプ内よりもっと困窮していた。ボランティアは450世帯に食糧を配付し、子供達には防寒服と文具類を贈った。空気は冷たかったが、子供達は自分のテントの前で新しいジャンパーを着た。(撮影・黄筱哲)

目次

【社論】
生命を救う特別な因縁
慈願／訳 4

【特別報道】
ヨルダンで過ごすシリア難民の新年
済運／訳 8

苦難の人々に治療を
慈願／訳 32

【健康ボックス】
ありがとうございます、
私たちはいりません。
葉美娥／訳 42

【世界の環境保全・スウェーデン】
無用の物を重用する（下）
済運／訳 48

【證嚴法師のお諭し】
人々の心が健康なら
地球も良い状態になる
慈願／訳 64

【主題報道】
骨髓が結ぶ縁 生命の奇跡
人は誰も人の子
高嶋由紀子／訳 78
■ ボディビルダーが大理石ベビーに出会った時
済運／訳 88

【納履足跡】
逆境に感謝しよう
慈願／訳 98

【生活の禅】
煩惱を乗り越えて、菩提に至る
本諦／訳 104

慈濟大事記【一、二月】
済運／訳 107

生命を救う特別な因縁

一九八〇年代に臓器移植が始まった台湾は、アジアで初めて臓器移植手術を行った国である。その中でも複雑で高度な技術が必要な骨髄移植は、医療技術のほかに、善の心を持った人々との縁に広く頼らなければならないものだった。

骨髄移植は白血病や血液腫瘍疾病の患者が家族の中からマッチする白血球抗原（HLA）を探し出すのが通常である。家族が少ない場合には親族に対象を広げるが、マッチの成功率は低く、非親族間による造血幹細胞移植に頼らざるを得ない。

骨髄移植が成熟している欧米では、政府のサポートのもと大型の骨髄バンクが開設されている。しかし人種が混じり合っているため、なかなかマッチしたHLAを見つけることは困難である。一九九二年、台湾から米国に留学していた温文玲さんが白血病にかかり帰国した。温文玲さんは、骨髓寄贈が三等親に限られていた当時の臓器移植条例を修正してほしいと政府に嘆願した。一九九三年、正案が通過し、白血病患者と家族の期待が集まる中、政府の委託により慈済^{ツイーチー}骨髓バンクセンターが設立された。アジア唯一の民間の骨髄バンクの誕生である。

骨髄バンクの設立は非常な困難を極める。莫大な資金がかかるほかに、台湾人の風俗習慣である固定観念を打破しなければならないという難題があった。まずドナーを募集して採血しバンクに登録する。だがドナーには年齢制限があり、マッチの確率を高めるためにはバンクに大量の骨髓液を保持しなければならず、ドナー登録者探しに奔走した。

最大の難題は固定観念の打破と宣伝である。台湾人は「髓」は体の精力を保つために必要な元素だと考え、骨髓液を抽出することは健康に害をもたらすと信じている。また儒教の影響で、体の一部を取り出すことは親不孝な行為であると考えている。そのため、ドナー本人が骨髓を寄贈しようと思っても、家族の強い反対によって阻止されることが多々あった。たとえHLAがマッチしても、毎年その半数以上が各種の原因により、移植手術までは至らない状況だった。

その中で立ち上がって奔走したのが、慈済ボランティアだった。彼らはドナー募集の段階で詳しく丁寧に説明し、登録後マッチした場合にはただちにドナー登録者を訪問し、たとえ門前払いされても粘り強く頼み込んでいた。そして手術が決まると、移植手術の前から後までドナーに付き添い、様々な過程を共に乗り越えてきた。

設立から二十三年目、慈済骨髓幹細胞センターは、世界骨髓ドナー協会の認証を受けた。現在ドナー登録者は四十一万人以上に及び、骨髓や周辺血の移植例は四千五百人に上っている。その中の大半がアジア、ヨーロッパ、米国など三十カ国の海外に寄贈され、二千八百例が成功している。

骨髓移植に対するさまざまな誤解もインターネット上に溢れているが、慈済は白血病、造血幹細胞の寄贈と移植に関する正しい認識の伝達に努めている。また、台湾で設立された骨髓バンクの重要性と現状も知らせている。そのほか、慈済はドナーと患者が対面する感動的なイベントも行っている。

《無量義経》の「徳行品」に、「法の内外においては吝嗇なく、頭目髓腦（たいもつねい）悉く人に施す」とある。その境地は慈悲情義の極致であり、医療科学と四方八方から寄せられた善心によって実現したものである。

ヨルダンで過ごすシリア難民の新年

◎文・張晶玫 訳・済運 撮影・黄筱哲

新年、シリア難民は戦火を逃れて異郷に来て早や六年目を迎えた。ヨルダンの慈済ボランティアは困窮し希望の持てない生活をしている難民に付き添い、物資の配付や炊き出し、施療などを行っている。

どんなに悲しみ嘆いても、関心を持ってくれる人がいれば、彼らは明日に向かって進むことができる。

●ヨルダンのアズラク難民キャンプで慈済の配付した米や食用油などを持ち帰るシリア難民の子供。大晦日の一家の食事は一時的に心配がなくなった。



●延々と15キロも続くアズラク難民キャンプには仮設住宅を提供している区域があるが、物資も医療設備も欠乏しており、冬はとても寒く、難民の生活は困窮している。

施療配付チームは早朝に首都アンマンを出て、アズラク難民キャンプに向った。道路の両脇は見渡す限り黄土が続き、地平線が空に繋がるほど荒涼としており、所々砂地に黒い石が見えていた。雲が低くたちこめ、また大雨が降りそうだった。慈済チームは車の中で、天気が晴れて施療と配付活動が順調に行われることを敬虔な気持ちで祈った。しばらく進むと、東のイラク方向の雲の合間から日が射し、西側の砂漠に珍しく虹が現れた。シリア内戦が勃発して五年以上が経つ。慈済チームはヨルダン国王子が特別に出してくれた通行許可証を持って、

「おじさんの家に爆弾が落ちたことはある?」。十歳のアヤが頭を擡げて聞いた。

アヤは家族と一緒にシリアからヨルダンに逃れて来たが、アズラク難民キャンプに来て長い。彼女は紺色のシャツに白のパンツ姿で食糧の配付をしてくれる外国人が大好きだ。彼女はいつも一緒に手伝う。

アヤの子供ならではの言葉を聞いて、慈済ボランティアは彼女の栄養不良で痩せて尖った顎を見て頭をなで、「ここは安全だから、怖がることはないよ」と言った。

「寒いのお腹が空くのは大丈夫。怖くない! ただ爆弾で死ぬのが怖い……」。アヤの声は少し震えていた。ボランティアは心が痛み、目頭が熱くなった。そして、彼女を抱き寄せて、「大丈夫。毎日笑顔で過ごしなさい。私たちはまた来るから」と言って背を向け、溢れた涙が荒地に吸い込まれていった。

難民キャンプに明日はない

二〇一六年の年末、真冬のヨルダンは昼間でも気温が非常に低い。口を開けて話すと白い息が出る。台湾から来た慈済

● 難民キャンプのある場所は荒れた砂漠で、水道設備のインフラが欠乏しており、住民は毎日、遠くまで歩いて各地区の取水場から水を汲んでいる。

三万八千人以上が収容されているアズラク難民キャンプを初めて訪れた。ここで施療と米、豆類、砂糖などの生活用物資を配付する。

第二区には病院も学校もない。アズラク難民キャンプの難民は普遍的に経済状況が良くないが、外に出て働きに行くこともできない。ただ先の見えない日々を過ごすだけである。

四十二歳のアリは、連日熾烈に戦闘が繰り広げられているシリア北部の大都市

アレツポから来た。七カ月前、何の予告もなしに空爆が始まり、彼の家を含む三十世帯の街が破壊された時、瞬時に家屋が倒壊し、踝と膝を骨折した。

財産も家もなくしたアリは妻と十人の子供を連れ、国境沿いで活動していた慈善団体と共に、何度も車に乗っては歩き、

また乗り換えては歩くことを繰り返した。五日間の逃避行の末にヨルダン国境に着き、一家はアズラク難民キャンプに収容された。アリの両足はきちんとした手当を受けられなかったために障害を持ってしまった。

難民キャンプではアリは二部屋の仮設



住宅を割り当てられた。中はセメント敷きで、国連難民高等弁務室が贈ったビニールシートが敷かれているだけで、冷たい冷気が足下から全身に上がってきた。二枚のシングルのマットレスと慈善団体が配付した数枚の薄い毛布が一家の全財産である。

アリ一家は二つの部屋を分けて使っていたが暖房は一つしかない。毎晩、漆黒の暗闇の中でアリは体を丸め、家族が凍てつく夜をどうやって過ごしているかを考えると涙が流れ、深い自責の念に駆られた。

国連難民高等弁務室は難民一人につき

毎月二十ディナール（約三千円）の買い物券を配付しているが、難民キャンプ内で販売している商品の値段は高く、アリ一家の買い物券は十日から十五日しかもたない。残りの日々はホブスという薄いパンでお腹をふくらますしかない。今月慈済が配付した米と豆類は一家の十日分の食糧になり、彼は心からアラールと慈済に感謝した。しかし、十日後からどうやって過ごしたらいいかアリにあてはなく、難民キャンプでは何の仕事もできないため、一日も早くここから出られるよう望んでいる。

以前、アリには家があったが、戦争で

難民になり、故郷を離れて生きて行くのが精一杯になった。彼は数百万人に上る難民の中の一人に過ぎない。

戦火が幼い顔に陰を落とす

黒い髪を肩まで伸ばした十二歳のリータギは一人で慈済治療区域に座っていた。「歯医者にかかるのは怖い？」と慈済ボランティアが聞くと、彼女は頭をふって微かな笑顔を見せた。

リータギは四年前、家族と一緒にシリアからヨルダンに逃れてきた。当時八歳だった彼女は砲撃で死んだ人の遺体を目

のあたりにした。「怖かった？」とボランティアが彼女の手を取りながら聞くと、突然彼女は肩をすくめ、口をかたく結んで何もしゃべらなくなり、驚いたような目で前方を見つめたま化石のように動かなくなってしまった。「シリアに戻りたい？」と聞くと、彼女は急いで頭をふった。

リータギはヨルダンの難民学校に通っている。学校に行くのが大好きで、特に

●シリアのアレッポから逃れて来たアリ（左前列）は、娘に付き添われて慈済ボランティアから物資を受け取り、家までの長い道程を他の難民家族と一緒に帰って行った。



●アズラク難民キャンプで、子供はこの見慣れない食べ物（ゆで卵）を少しずつ口に入れる。



コーランを読むのが好きだ。恥ずかしがり屋で口数の少ない彼女だが、コーランの何節かをすらすらと暗唱することができる。「コーランを読んでいる時だけ心

が落ち着くのです」とゆっくりとボランティアに言った。

慈済施療配付チームが泊まったホテルでは真つ白なゆで卵が必ず毎朝の朝食に出てきた。痩せ細った子供がいたら、それをあげようと思い、チームメンバーが出発する前にゆで卵を二つポケットに忍ばせた。

「坊や、卵食べる？」とボランティアはしゃがんで卵を一つ取り出し、三歳の子供の小さい手に乗せたが、子供はびっくりしたような顔で卵を握ったまま微動だにしなかった。ボランティアは恥ずかしがって食べないのだと思い、子供の頭

をなでて。「ほら、食べなさい」と言うと、子供は殻のついた卵をそのまま口に入れてようとしたので、ボランティアは慌てて殻をむいてあげた。

何日かしてボランティアは卵をもらうと捨ててしまう子供がいることに気がついた。なぜなのか分からず、悲しく思っていた。後に、難民キャンプで生まれた子供達は卵を見たことがなく、食べ物だと知らないからだとわかった。

ボランティアは卵を捨てる理由が分かった後、ホテルに五百個のゆで卵を用意してくれるよう頼んだ。「どうしてそんなにたくさんの卵が要るのですか？ ホテ

ルで出しているだけで足りませんか？」とホテルのオーナーは不思議に思っていた。「明日、難民キャンプでシリア人の子供達にあげるのです」と慈済ヨルダン支部長の陳秋華師兄がオーナーに事情を説明した。するとオーナーは豪快に、「この五百個の卵は私からの贈り物です。シリア人を支援してあげてください」と陳秋華に言ったのだ。

冷たく澄んだ朝、五百個の白い卵が一箱ずつ慈済施療配付チームと共にアズラク難民キャンプ第三区の女性区域に到着した。

もはやボランティアが一人ずつ配るこ

とはせず、卵を小児科診療所に置き、診察に来る人にまず卵を二つ贈呈した。小児科ではほとんどが母親が子供を連れて診察に来ていた。中に入るなり小さなサプライズが母親たちを待っていた。おびえて母親の横にくっついていた子供を前に引っぱり出し、卵の殻をむいて小さな手に乗せた。子供達はこの見慣れない食べ物或少しずつ口に入れると、可愛い笑顔を見せた。

砂漠の中の原始的なキャンプ生活

砂漠気候のヨルダンに大雨が降り出し

で呆然と立ちすくんでいた。周りには乾燥した細い梢が置かれてあったが、それは暖房にする薪だった。

生活環境がどうあれ、住民は一ヶ月に四十ディナール（約六千円）でテントを借り、その上水も買わなければならない。テント区で薄く破れたセーターを着た男の子が裸足で泥の中に立って、制服姿の慈済ボランティアを好奇の目で見ていた。その子は遠くから見ていたがやがて駆け出し、小さな体はテントの後ろを回って見えなくなった。

ボランティアたちは身震いすると、素早く数組に分かれて一つ一つのテントに

た。陳秋華師兄はマフラグ、ザータリ難民キャンプ周辺のテント区での配付活動に影響が出ることを心配した。あの広大な砂漠地帯は雨になるとぬかるんだ黄土になり、テントを張るのも歩くのも極めて困難になる。

しかし、このような天気でも皆の決意と信心には全く影響せず、施療配付チームは予定時間にテント区に到着した。いくつかの色あせたオレンジ色のテントは急速に下がった気温の中で風に揺れていたが、薄いテントは遮る物がない大地を吹き抜けて来る強い寒風に必死に抵抗していた。住民が飼育していた羊は囲の中

向かった。シリア人難民の子供たちを集めてサイズに合ったジャンパーを配付した。

ボランティアはひざまづいて一人ずつジャンパーのジッパーを閉じてあげると、鼻水をたらした子供たちが照れ笑った。

治療を待つ数百人の子供

シリアの内戦はもう五年以上続いており、故郷を逃れた住民は数百万人に上る。二〇一二年七月、ヨルダンはザータリ難民キャンプを設置した。今、八万人余り

●ヨルダン慈済ボランティアの陳秋華は自宅を開放し、治療配付チームはアンマン市のシリア難民ケア世帯に小児科と歯科の診療するために、皆でそれぞれの診察室に配置換えした。

のシリア人を収容しており、世界で二番目に大きい難民キャンプである。

そこはちよつと変わった居住区になっている。というのも、雨が降ると泥道になってしまう路地の両側にはシリア人難民の店が建ち並び、低いブリキ屋根には無造作に各種商品が吊り下げられている。キャンプの灰色

の塀には政府の堅苦しい絵が描かれ、塀の上には有刺鉄線が張り巡らされている。

陳秋華は泥道を歩いて、慈済医療志業の林俊龍執行長と台中慈済病院の簡守信院長と共にザータリ難民キャンプの中にあるAMR (Arabian Medical Relief) 病院に病気の子供達を訪ねた。この二年間、慈済ヨルダン支部はAMR病院の紹介でザータリ難民キャンプに住む百人以上の子供達の手術を支援して来た。

大勢の人がAMR病院の小さなブリキ造りの事務室に集まり、互いに近況を尋ね合っていた。その時、屋外から騒がし



い声が何度も聞こえた。一人の恥ずかしがりの男の子が大人に連れられ、手に「ありがとう慈済」と英語で書かれたカードを持っていた。そのほかにも大勢の大人と子供が手にカードを持って集まっていた。親がかつて慈済の支援で手術を受けた子供達を連れて来たのだった。

陳秋華は数カ月前の支援ケースで、鎖肛（直腸肛門無形。正常な位置に肛門がない状態）だった四人の子供も来ていた。皆元気に走り回っているのを見て目頭が

熱くなった。当時、その子供達は排泄することができず、お腹がふくれ上がっていた。親は病苦に苛まれて息も絶え絶えの子供を抱いてあちこち治療を求めたが、往々にして断られるか、医療費が払えないために治療を中断し、悲しい顔で失われていく子供の顔を眺めているしかなかった。

陳秋華は難民キャンプの支援でシリア人のモンナド医師と知り合い、彼の診断を経て、大病院でそれらの子供達に手術する道が開けた。

これらの親が抱いてきたのは、鎖肛だったり生命に関わるような重度の脱腸や

後日癌になりやすい停留精巢（睾丸が正常な位置にない状態）の子供達で、皆、慈済の支援で手術を受け、一命をとりとめている。子供はとくに当時の苦しみを忘れているが、林俊龍執行長はこの親たちの屈託のない笑顔を見て、「この笑顔は何にも増して貴重なものです」と陳秋華に言った。

ほかの親も慈済ボランティアが来たと聞いて、治療を受けられることを望み、心配顔で病気の子供を連れて来ていた。モンナド医師は事務所の小さなソファの前にしゃがんで一人一人子供を診察した。医者を怖がる子供の泣き声は人々を



心配させた。自分の病状が重く生命に関わることを知らず、恥ずかしそうな笑顔を浮かべている子もいた。

林俊龍執行長は、この世界で二番目に大きい難民キャンプには壊れて使い物にならないレントゲン検査機が一台あるだけという状況を見て、ため息混じりに言った。「子供達に罪はない。正に共業（ぐんごう）です」

簡守信院長は厳粛な顔でモンナド

●慈済ボランティアは初めてアズラク難民キャンプで施療活動を行った。多くの女性が聞いて集まり、臨時に内科診察室となったコンテナの外で順番を待っていた。

移動の度に貧しくなる遊牧民族

医師と一緒に子供達を診察した。腎臓疾患で水がたまり、腹部が大きくなった子、血管腫瘍で痛みを感じ沈黙した男の子。重度の脱腸で、生まれて数日の男の赤ちゃんなどを診察するうちに、彼の表情はますます堅くなり、「すぐ入院させないといけません」と陳秋華と林俊龍執行長に言った。

三日後、最も緊急を要する病状の重い七人の子供はアンマン省のAKILAH病院で手術することになった。しかし、ザータリ難民キャンプにはほかに三百人余りの子供が苦しみながら手術のチャンスを待っている。

首都アンマンと北部の都市ラムサには慈済ヨルダン支部が長期的に世話している七十九世帯の難民がいる。二〇一六年末、彼らのため歳末祝福会を催した。林俊龍執行長が一人ずつ福慧お年玉を手渡した時、ラムサから来たアリマンはカバンから前の年にもらった歳末祝福のお年玉を取り出した。彼は慈済と過ごした昨年の全ての出来事を回顧しているようだった。

アリマンがシリアからヨルダンに逃れてすでに四年以上になる。一緒に逃れて

来た夫は再びシリアに戻って内戦に参加したが、今はシリアの刑務所に入っている。アリマンは一人で四人の子供とヨルダンで生活しているが、知り合いはおらず、慈済が彼女と子供達の困窮した生活を支援し、奨学金を出して子供達を学校に通わせている。やっと夫がヨルダンに戻って来たが、すでに重い病気にかかっていた上に、足にも障害を持っていた。

運命に翻弄されたが、慈済の支援によって、アリマンは今の生活を幸せだと感じている。祈りの歌声が聞こえて来ると、歳末祝福会に参加した全ての人は一斉に手にしていたペンライトをつけ、光の点

が揺れ動いた。アリマンは去年と今年もらった二つのお年玉を軽く手でなでていたが、静けさをたたえた顔はヨルダンの星空のように美しく、穏やかだった。

ヨルダン慈済ボランティアは難民の世話をするだけでなく、リバーヴァレー地区と死海の南端にある貧しいベドウィン人の世話をして来て十七年になる。このアンマンから死海の南端に通じる道をボランティアは百回以上通っている。真っ青の死海は波一つない静けさを保ち、遠く連なった黄土の崖のイスラエル領が見える。

極度に塩分濃度が高い死海は太陽に照



らされ、宝石のようにエメラルドグリーンに輝いていた。澄みきった波が海岸を洗い、鍾乳石のように白い塩の結晶を残した。慈済施療配付チームは美しい海岸沿いを通って、黄砂の中にあるベドウィン人の集落に到着した。

ベドウィン人とは広大な砂漠で遊牧生活をするアラブ民族で、駱駝や羊を飼ったり狩猟して水と草のある場所を求めて移動する生活をしている。中世初期から彼らはアラビア半島の人口の大半を占めた。非常に忍耐強く苦勞を厭わないが、情熱的で客好きで、自由奔放、何にも囚われない人たちである。

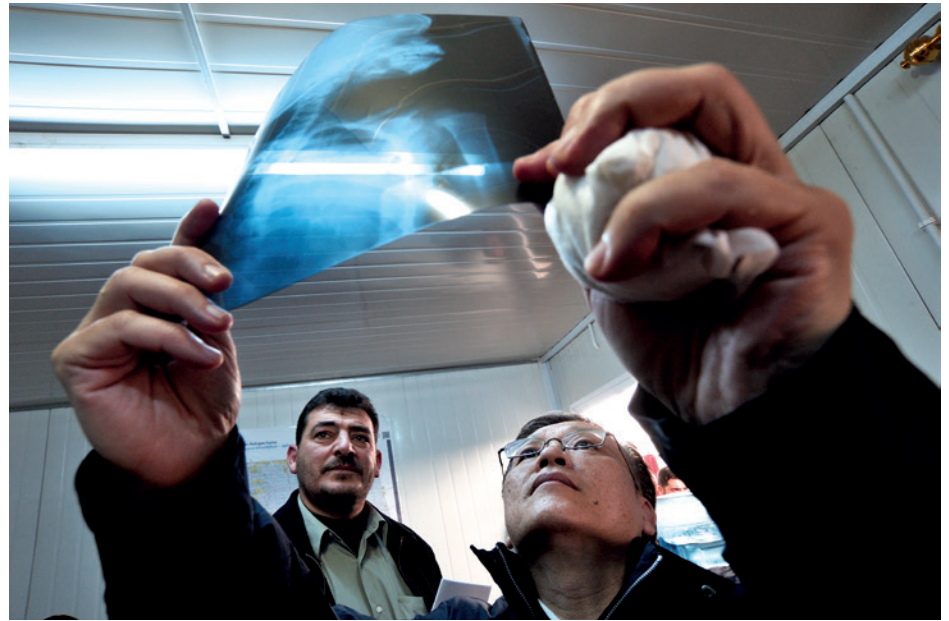
しかし、その楽天的な性格で知られる遊牧民族が生活の場としていた環境が地球の気候変動に伴って年々旱魃が進み、草が生えなくなった。数千年来、羊と駱駝を財産としてきたベドウィン人はもはや十分な水源と草原を見つけて遊牧することはできなくなり、ますます貧しくなっている。都市周辺の荒地に住みついて貧民になるしかなかった。

慈済はその集落の学校を借りて、ベドウィン人のために小児科、内科、外科、漢方医科、歯科の施療を行うと同時に、五百世帯に生活物資を配付した。

学校の教室は大きいとは言えないが、

非常に清潔で整頓されていた。長いローブとマントをまとい、伝統的なアラブのターバンを頭に巻いたベドウィンのお年寄りが、杖を持って静かに配付を待っていた。手に慈済の引換券を握りしめ、慈済ボランティアを見ると歯が抜けた口を開けて笑った。ボランティアは、生活物資を入れたビニールの手提げ袋を持ち、背を向けてゆつくりと歩いて行く老人の姿を見て、心が和むと共に忍びなく感じた。ずっと自給自足の生活をして来た彼

●死海南端のリバーヴァレー地区は医療資源に乏しく、貧困者が施療会場を訪れた。通訳ボランティアが症状を説明し、医師が診察と治療を行った。



● 慈済施療配付チームは2016年12月下旬にヨルダンで5回の施療活動を行い、現地の医師を支援して慈済が支援している病気の子供達を治療した。ザータリ難民キャンプで台中慈済病院の簡守信院長（右）は家族が持って来た古いレントゲン写真を見て、病気の子供が手術を受ける前と後の状況を確認した。

らは、生活がここまで困窮していなければ、他人から物資を受け取ることはなかっただろう。

苦難の地を護ってきたことをふり返って

二〇一六年最後の日は慈済ヨルダン施療配付チームが台湾に戻る日だった。彼

らは早朝に出発して陳秋華の家にいき、出発前の三時間を無駄にすることなく、アンマン地区のケア世帯に施療を行った。

陳秋華は最後の最後まで、遠く台湾から来たボランティアたちを休ませてあげられず、残酷なことをしたと気が咎めていた。しかし、皆は彼の肩を叩き、励ましの笑顔を浮かべて、素早く彼の家を施療所に配置し直した。彼はこみ上げてくる感情を抑えられず、背を向けて目頭をぬぐった。

数人の医師が応接間の大きなテーブルを移動し、ソファを全部壁際に寄せた。

大きな空間ができ、四つの歯科の診察用椅子が入ると、歯科医と助手は水色の隔離衣を着用し、歯科特有の「ジージー」という音と共に診療が始まった。

胃腸内科の蔡筱筠医師は小さめのテーブルを寝室前の廊下に置き、施療の受付にした。オープンキッチンには薬局になり、静かな寝室は小児科の診察室になった。もう一部屋の寝室は内科と外科の合同診察室である。

カーペットが敷かれた心休まる居間には早くから十数人のケア世帯が診察を待っていた。彼らは全てヨルダンに逃れてきたシリア人で、すでに三年余りになる。

異郷での生活は苦しく、ヨルダンの慈済ボランティアは彼らの存在を知ってから付き添うようになり、食糧と医療を支援してきた。悲しみが消えることはないが、ケアが彼らを明日に向かって歩み続ける力になっているはずである。

皆が忙しい中にも優しさを発揮している姿を見て、陳秋華は五日前、配付活動の最中、皆で力を合わせて泥道にはまったバスを押したことを思い出した。その光景は四十数年前に證嚴上人が数名の弟子と一緒に田舎へ家庭訪問した時、力を合わせて小川で動けなくなったバスを押したのと全く同じ光景だった。

陳秋華は自分は一人でないことを知った。ここ数年間、彼は一手に慈済ヨルダン支部の責任と使命を担ってきた。多くの人は彼の苦勞を思いやったが、それは「苦」ではなく、「どんなことも成し遂げられないことはない」と彼は思った。

*

ヨルダンの美しい死海には昔から伝わる伝説がある。死海は元来陸地で、人間が絶えず争うため、イスラム教予言者のルートは彼らに邪から正に回帰するよう勧めたが、彼らは悔い改めることを拒否

したため、神はこれら改心せずに悪事を続ける人間に対して懲罰を与えることを決めた。そして、ルートに対して家族と共に村を離れ、村で何が起ころうと決して振り返ってはならないと戒めた。

予言者ルートが決められた時間に村を離れると、村は瞬時にして大火に吞まれ、陥没して今の死海ができた。しかし、ルートの妻は好奇心からこっそり首を回して覗き見したとたん塩柱になり、千年の

後も死海近くの丘の上に立ち、日夜首を回して死海を望んでいるという。ヨルダン慈済ボランティアは戦火も千里の道程も恐れず、この荒れた大地を頻繁に行き

来している。二〇一四年十一月、国連難民高等弁務室が難民への医療支援を中止し、全ての慈善団体は長引く戦争のため撤退した。しかし、慈済は逆にその時期を選んでヨルダンでシリア難民のために大規模な施療と配付を開始した。遠い砂漠の中、難民に対するこの愛は途切れることなく受け継がれている。

苦難の人々に治療を

◎文・潘翠微 訳・慈顔 撮影・黄筱哲

診療を求めひっきりなしにやって来る患者が多い、物資配付券を手にした難民が押し合う。

ボランティアは問診、薬の調合、物資の配付に休む間もない。唯一の願いは彼らが苦から解かれることだった。



「五、四、三、二、一、ハッピーニューイヤー」と歓声がドバイ空港に響く。台湾へ帰る乗り継ぎを待っている間、私たちは大勢の人たちと新年を祝っていた。そしてこの数日間で経験した様々な出来事を振り返った。シリア難民にとって新年を迎えることは、他国へ漂流してきた辛い日々がまた新たな日を重ねるに過ぎないのだろうか。どこに行けば彼らの明るい明日があるのか。未来の希望はあるのか。熱気に包まれた賑やかな中で、純真な彼らの一人ひとりの顔を思い浮かべていた。

情け深い勇士は何事も恐れない

二〇一六年十二月二十三日の深夜、慈済ヨルダン施療配付の任務を負った三十五人の団員は、台湾を出発し十時間あまりの飛行でドバイに到着、さらに乗り継ぎ四時間の飛行を経て、ヨルダンの首都アンマンのクイーンアリア国際空港に到着した。全員が無事税関を通過すると、遠くにヨルダン支部執行長の陳秋華

●アズラック難民キャンプ内で支援物資をもらおうと押し合うシリア難民。慈済ボランティアは難民がどれほど食糧に困窮しているかを目の当たりにした。

さんが合掌して私たちを迎えているのが見えた。

この度、台湾の団体が遙か海を越えてスミーズにヨルダンに到着できたのは、秋華さんが十二月から何回も台湾との間を往復し、施療と物資配付の活動の準備をしてくれたお陰だった。また薬品や医療器材の税関通過、宿泊所、交通手段の手配、冬季配付物資の買いつけなどの煩雑な仕事は、現地ボランティアたちと何度も会議を重ねながら行い、重責を一身に担っていた。

法名を済渾という陳秋華は、ヨルダンの地で慈済の活動を始めてから二十年以

上になる。彼は四十年以上に亘りヨルダンのハッサン国王の護衛と王室護衛のテコンドーのコーチを担当し、王室から絶大な信望を得ている。そのため今回の慈済人医会施療団は、ヨルダン国より多大な協力を得ることができた。

ヨルダン支部で慈済委員（慈済の幹部ボランティア）の認証を受けた者はわずか九人だが、長年に亘って現地の貧困者の訪問ケアや医療補助を行っている。二〇一二年、台湾から衣類十万着と八千枚の毛布をヨルダンに送ったことが、今回の慈済のシリア難民に対する長期支援の発端になっている。

陳秋華は、長年現地で指導してきたが、人種と宗教の違いにより、慈済の活動に安定して参加できる人材がいらないと言っていた。この度、世界七カ国からヨルダンへ手助けに来てくれた四十二名のボランティアの一人ひとりが、シリア難民の精神的な模範となることができると言った。

施療や物資配付の現場で陳秋華は終止笑顔を絶やさず、アラビア語で人々に話しかけていた。少し前、彼は膝関節の手術を受けたばかりで、ゆっくり歩きながら人々の間を行き来している姿に感動した。ふと《法華経五百弟子受記品》の中

に出てくるフルナ尊者の話を思い出した。フルナ尊者は寛大な心と強靱な気力と大きな勇気を抱いて遙か遠い地へ赴き、困難にひるまず説法し、法を伝えたとある。心優しい熱血漢の秋華さんが砂漠に入って苦も厭わずに奉仕をしている姿が、まるでフルナ尊者のように思われた。

親身になり

誠と愛で障害を乗り越える

私たちは、シリア難民が住むキャンプの生活環境を知るため、二カ所のヨルダ



●多くの男性が逃亡の過程で亡くなったり、障害者になっている。女性は他人と接触ができない伝統があるが、一家を食べさせるため、配付物資の受け取りに來なければならぬ。

治療と物資配付の活動には、七十人ほどの現地ボランティアが参加し、各自持ち場について互いに協力し合っていた。台湾と中国からの留学生は通訳として欠かすことの

いた。

ン最大の難民キャンプ、ザータリとアズラックを訪問した。テントに着くと、私たちはまず来ましたよと手で合図をし、相手の表情を見て歓迎していることを確認してから、靴を脱いでテント内に入った。キャンプ内のコンテナ住居やテントが難民の住いで、薄いカーペットや国連難民高等弁務所が支給した厚地の布を敷いている。地面からは冷たい湿気がひんやりと足裏に伝わってきた。

カーペットの上には長方形の座布団がいくつか置いてあり、隅には折り畳んだ毛布が置かれていた。昼間はリビングとして、夜は寝室として利用しているのだ

ろう。キッチンには簡単な炊事道具といくつかの椀や皿、厚地の布で仕切ったシヤワールのみの浴室。トイレは屋外にある。テント区域から共同のトイレまでは大分離れている。水不足のため難民の家庭用水は、公共給水場からバケツで運ばなければならぬ。

インフラが整っている国で便利な生活用品に囲まれて暮らす私たちに、シリア難民の苦しみを感じることができるだろうか？ 戦火を浴びて家は破壊され、帰る家もない彼らの未来はどこにあるというのか。この時期は寒い冬だったが、子供たちは薄着のまま裸足で泥道を歩いて

できない存在だった。国を出る前に医療関連や日常に使うアラビア語を調べていたので、診療を滞りなく行うだけでなく、簡単な言葉で患者や家族を慰めることができた。

配付の会場がバラバラだったため、その都度対処しなければならない。屋外、屋内にかかわらずスムーズに、そして、相手を尊重する態度で行わなければならない。医療現場に内科、外科、小児科、歯科、薬局、受付や待合室の区域を設置するため、医療スタッフはボランティアの協力が必要だった。

治療を求める患者の多いことと、物資

と聞く時は、頭を傾げて合掌した手を上に上げる。治療や配付の現場ではボディランゲージで村人や難民が互いにコミュニケーションを取っているのをよく見かけた。

ワセリンは難民の女性にとっては美容品で、風霜に耐えた肌を潤すことができる。治療の現場ではワセリンを持って、待合室で待っている女性や子供に「ワセリン」と言って手のひらにこする動作を見せると、皆喜んで両手を伸ばしてきた。

女性や子供の両手は袖で覆われているので、私は一人ひとり袖をたくし上げてからワセリンを塗ってあげていた。する

配付券を持っていない難民が自分も券を欲しいと殺到した。薬の調合、問診、配付という一連の多忙極まる作業に食事や水を取ることさえも忘れ、ただシリアの人々が心身に受けている苦痛から一日も早く解かれることだけを願っていた。

言葉はいらない 真心で示す

中東諸国はアラビア語が主要な言語で、国際的言語である英語はほとんど通じない。子供は何人いるかと尋ねる時は、右手で違う高さで示し、家はどこか

とその時一人の女の子がさつと出てきて、私の助手になってくれた。女の子は私の手を引いて、一人ひとりにワセリンが必要かとアラビア語で聞いてからワセリンを必要とする人に塗ってあげた。

私はワセリンを女の子に渡して、みんなに塗ってあげると動作で示し、アラビア語で「スクラン（ありがとう）」と言ってお互いに感謝し合った。利発そうな女の子が私に見せた親しみのある笑顔は、国境や人種を超えた無言の言葉だった。毎日治療を終えて別れの時が近づく頃、この女の子はいつも静かに私の前に現れるのだった。とうとう最終日となっ

た時、私は彼女を抱擁して無限の祝福を送った。

砲火に傷ついた心には良薬が必要

戦乱により家庭が崩壊したシリア難民の子供は、心の傷の深さゆえに、幼い顔に小さいながら大人のような成熟が見られた。もしかしたらすべてを失ったせいで、掌を上にして手を伸ばしいつも何かをくださいと求めなければならぬ動作が、当たり前のようになっているのかもしれない。

配付の現場では、慈済が発行した配付

券を手に行っているのに押し合っていた。もらえないのではとの不安と焦慮感が感じられた。食物をもらえなかったら家族が寒空で飢えを忍ばねばならないと、心配で仕方がないのだ。

施療と配付は彼らにとって一時の困難をしのぐ慰めに過ぎない。彼らが互いに心を寄せ合い、受けた心の傷を癒すことこそ最良の良薬である。十日間の行程で五回の施療、四回の配付と二回にわたる歳末祝賀会を催し、二〇一六年の歳末に滞りなく活動は終わった。この度の活動で医療サービスを受けた人は延べ千三十七人、物資配付を受けた人は

三千二百三十八世帯に上り、そのほか千五百着のコートと千八百八十二個の文房具が贈られた。

この行程で苦を見て己の幸せを知ったことに感謝し、善縁を把握してこの世に福をもたらさなければと切に思った。心の中で彼らを忍びなく思いながら、この度の活動が永遠の祝福になることを願った。

●種々の困難を克服して慈済ボランティアは、アズラック難民キャンプで初めての施療を行い、世界の慈済人の祝福を届けた。



ありがとうございます、 私たちはいりません。

一つよりも多めに買った方が安い？
お買い得品は買わないと気が済まない？
「激安」「無料」などの宣伝文句に引き込まれた時、冷静に考えてみてほしい。自分は本当にこれが必要なのかと。

◎文・伍弁苓／訳・葉美娥／絵・泳子



「ママ、ポップコーンが食べたいよ」。
映画館のチケット売り場で並んでいた時、ある親子の会話がふと耳に飛び込んできた。前の列に並んでいる四、五歳の男の子がお母さんにせがんでいた。お母さんがポップコーンを注文すると、「ポップコーンとソフトドリンクのセットがお買い得ですよ」とすぐに販売員に勧められた。お母さんはその勧めに従ってセットを買い、息子も喜んで買ったものを持って映画館に入った。

私たちの番になった。
見たい映画

のチケットと座席を指定した後、娘も周りにから漂ってくるポップコーンの匂いに誘われ、欲しいとせがむので、私はポップコーンだけ買い求めた。すると販売員は不思議そうな顔で、「ポップコーンは四ドル九十セント（シンガポールドルで約三百九十二円）ですが、もう一ドルでドリンクもつきますよ」と聞いてくる。私は「わざわざご丁寧にありがとうございます。ポップコーンだけで結構ですが」と再びお礼をして、きっぱりと断った。

それでもこの女性店員は「頑固な客だ」と

言わんばかりに、「このセットなら、お子

さんはポップコーンが食べられますし、喉が渴いたらドリンクも飲めますよ。本当にお買い得ですよ」ともう一度私を説得しようと試みたが、私の考えは変わらなかった。損得の計算ができない母親だと彼女は感じたことだろう。

なぜいらないのか？

後にこの時のことを友人に話すと、友

人は「この販売員は多分

あなたが栄養士だとは知らないのね」と冗談を言った。「違いのよ。これは栄養士だからとか、ソフトドリンクは甘すぎるからとか、あるいは一ドル多く払うからとかの問題ではないの」と私は笑って言った。「それなら問題は何なの」と友人は呆然とした。「問題はとっても簡単な。だって、私には必要ないから」と私は言い返した。

間違いなく、答えはこんなに簡単だ。あの時、ソフトドリンクは不要だったの

だ。私のカバンには水を入れたボトルが二つあるのだから、たとえ無料でくれても、同じようにお礼をした後、断っていた。

私の自宅にもいつも無料のドリンクが配達されてくる。地下鉄の駅でもティッシュなどを配っているが、私はいつもそれを断っている。理由は単純。いらない、あるいは使う習慣がないのだから。

皆さんもよくこのような体験をしたことがあるのではないだろうか。パン屋に

入ったら、三個入りケーキに特別価

格の値札がつけられている。三個入りだと一個当たりの単価が安い。ある日、ケーキを買いに行った時、あるお母さんが子供に三個入りを買った方が得だと算数を教えてあげているのを見た。一個当たり二十セント（約十六円）安くなると。

私は娘とこのことについて話した。本当に食べたいのなら一個だけで十分。もしも一個につき二十セント得をしたいからという理由で三個入りを買ったら、一人で三個食べた、あるいは、本来食べたくないパパとママも

無理やり食べさせられ

ることになる、と

私の考えを娘に伝えた。「ママにとってこれは特別価格でも、お金を節約することでもない。浪費なのよ」と私は言った。

自分で作ったらもっと健康

ポップコーンの話に戻ろう。ポップコーンが好きな娘のために、スーパーへ行ってポップコーンの種を買って、家で作ることにした。まず、用意したフライパ

ンを熱し、次に少し油を

入れて、ポップコーンの種と砂糖を入れ、それから蓋をして、フライパンを振りながら全部弾けるのを待ただけだ。ポップコーンの種がフライパンの中で様変わりし、ほかほかの白い花のようになったのを見て、娘は魔法を見たようにとても驚いていた。

でも、娘はポップコーンを一口食べると、「ママが作ったのは甘くないわ。映画館の方が甘くてもっと美味しいの」と言った。

私は娘に次のように話した。食べ物

美味しいかどうか、人によってそれぞれ好みがあるが、その基準はないということ。ママにとって「甘い」イコール「美味しい」ではなく、映画館のポップコーンはママには甘すぎて、水がたくさん飲みたくなると。

他の食べ物と同じく、正しく調理すれば、低脂肪で低糖のポップコーンが作れる。しかし、私たちが余計なバターや砂糖を入れたために、ポップコーンは高カ

ロリーのおやつにな
ってしまい、た

まに少し食べることでできなくなる。

ポップコーンを作るのは、それほど難しくないが、子供のためにエプロンをつけて、フライパンを取り出す気があるかどうかの問題だ。

ある日、友人が「お金がないわけじゃないのになぜテレビを買わないの」と聞いた。その時、私はポップコーンとドリンクの特別価格セットを買わない理由と同じ、「必要ないからよ」と答えた。

無用の物を重用する スウェーデン式リサイクル（下）

ゴミではなく資源である

二〇一一年にスウェーデン政府は新しいハイテク環境保護計画を打ち出した。期間は四年で、環境保護に関するハイテク技術の研究開発に毎年約十億円の資金を拠出した。また、政府は環境ハイテク

会社を後押しする環境を作り、資金援助や優遇策で企業がグリーンテクノロジーの開発を続け、それを輸出することで利益を得ることを奨励している。政府の支援のほか、民間のミストラ基金会も加わって、毎年約二十億円を成長するハイテク会社や研究機関に投資している。スウ



エーデンの統計局によると、現在環境ハイテク産業に従事している人口は四万人を越え、毎年約一兆二千億円の市場を創出している。先月の上期で紹介したエンバック社はスウェーデン環境政策の参加企業の一つである。

同社は先進の真空技術と機械を使って企業や団体、ジャールワ地区の家庭ゴミを収集している。例えば、住民が壁の中に入れた家庭ゴミは真空システムによって自動的に会社のリサイクル場に送られ、

●リサイクルは非常に重要な課題であり、ゴミ箱はバブリックアートになっている。

自動化された真空回収システム

(図・エンバック社)

ゴミは分類、梱包されてリサイクルビンに入れられた後、しばらく貯蔵される。リサイクルビンは定期的に自動的に空にされる。機械が気圧差を利用してゴミを地下に張り巡らされた管を通して、リサイクル業者エンバック社のリサイクル工場に送り、分類と処理が始まる。ゴミは地下で送られるため、異臭がすることはない。

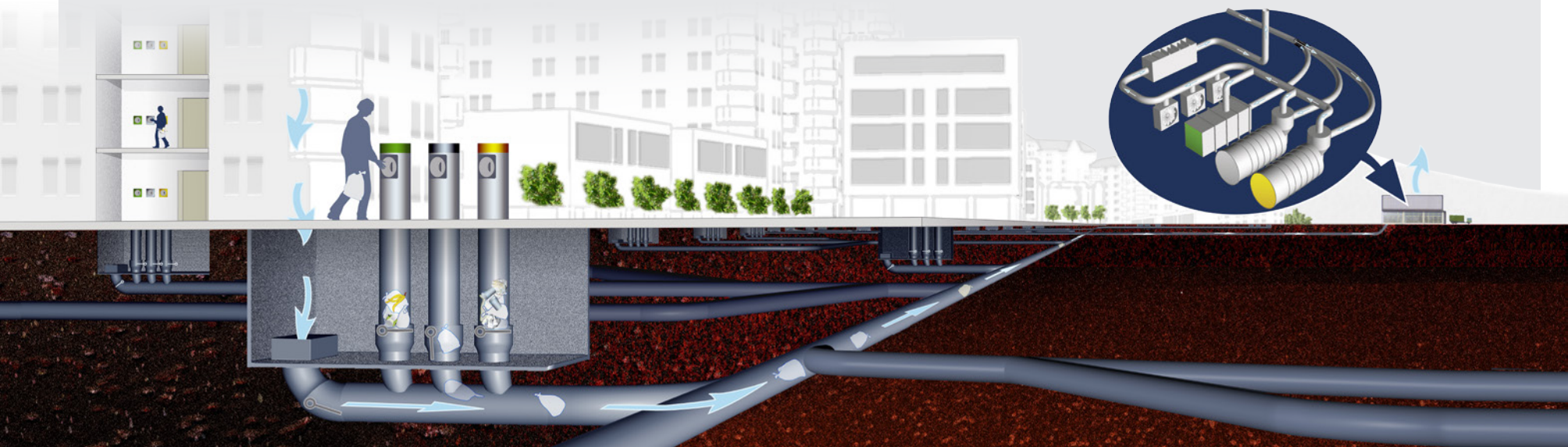


室内の壁に取り付けられたリサイクルビンは梱包したゴミをそのまま入れることができる。



エンバックの屋外リサイクルビンは一般大衆が使い易いように設計されている。

エンバック社のリサイクル工場は全て自動化された機械で制御されている(右)。大衆はエンバックが提供している様々な色のゴミ袋を使ってゴミ进行分类している(下の写真)。機械はゴミ袋の色によって処理している。



●処理した後の廃棄物は筒状の貯蔵庫に入れられ、漏れ出さないようになっている（写真上）。掘削技術を活用して廃棄物から燐や塩などの使える物質を取り出している。



分類され処理される。

「住民は家庭の生ゴミや紙類、瓶、缶、回収できない廃棄物などをそのままエンバックのリサイクルビンに入ればいいのです。そして今私たちはそのリサイクルビンの側に立っていますが、鼻をつく異臭は全くしません」とマレーケット・事業開発担当の上級副CEOジョナス・トンブロムが説明した。

今までのゴミ箱は見た目が悪い上、すぐに悪臭を放つ。同社が提供するリサイクルビンはデザインが斬新で、定期的に空気の圧力によって自動的にゴミを清掃するため、異臭を放つことはない。このように特殊な設計が施されたリサイクルビンだけでなく、リサイクルセンター自体が特殊で、全てが自動化されており、作業員が一人もいない。機械が自動で作業し、モニターしながら集めたゴミを処理し

●ランセルスのゴミ処理場は様々な廃棄物を収集し、家庭ゴミや有害な工業廃棄物も含めて、先端技術で分解処理することで土地が汚染されないよう努めている。



しており、全く人手がからない。

完成度の高い真空回収システムは世界中の政府機関や民間企業や団体の目を釘付けにし、使用されている。例えば、北京のワールドセンターやシンガポールの黄廷芳総合病院、カナダケベック州の住宅街やデパート、そして台北の101ビルもこのシステムを使用している。

ゴミを輸入する

外国からの舶来品といえば、斬新奇抜な物かロマンチックで異国情緒のある流行品というイメージが湧いてくる。しかし

し、スウェーデンが輸入している品目の中に思いもつかない物が一つある。ゴミである。

「ゴミは最も価格が安い燃料なのです」。これはWTE（ゴミからエネルギー）という概念である。WTEはスウェーデンの資源回収政策の中で非常に重要な項目の一つである。その目標は回収して再利用できないゴミの解決である。現在スウェーデン国内には三十二基のゴミ焼却炉があり、ゴミを焼却してエネルギーに換えて、熱エネルギーと電力を二十五万世帯余りに供給している。徹底した政府の資源回収政策の実施と民衆のリサイクル

●種類の異なる回収物を入れる色分けしたり
サイクルビンが置かれている。



ル意識の高さにより、国内で発生するゴミはほとんどリサイクルされているが、全ての焼却炉を稼働させるにはかなりの量が不足している。そのため、スウェーデンはなんと毎年外国からゴミを輸入しているのである。

スウェーデン廃棄物管理回収協会の統計によると、二〇一五年だけでスウェーデンは外国から百五十万トンのゴミを輸入しており、二〇二〇年には二百三十万トンに達すると予測している。主なゴミの輸出国はノルウェー、イギリス、イタリアで、これらの国はスウェーデンにお金を払ってゴミ処理をしてもらうが、政



(写真 /Sonia Sabe/Imagebank. sweden. se)

府は焼却して得られるエネルギーを販売することができ、一石二鳥なのである。ストックホルム市郊外のブリスタエネルギー工場はゴミが金になる商売だと見込んでいた。燃料の使用率は九十パーセントに達していましたが、工場の運営は大変でした」とブリスタエネルギー工場の責任者マッツ・クラーションが説明した。「新しくCHP（電熱供給システム）工場を建設したゴミを焼却して熱と電気を



●ゴミ収集車が街を走り回って効率的に家庭ゴミを収集している。
●大型の家庭ゴミも特殊な回収袋に入れて専門の処理場に運ばれる。

産出しています」CHPエネルギー工場ではゴミを燃やして得られた熱エネルギーで湯を沸かし、総延長線二百六十四キロにもなる地下に張り巡らされた熱供給網になり、地域の各家庭に供給されている。お湯が住宅に送られた後、使用済みのお湯は再び工場に回収され、そこから分離された熱エネルギーが再利用される。ゴミを焼却してエネルギーを得る方法は斬新であり、化石燃料への依存を低める、また国内のゴミを減らすこともできる。しかし、大量に物質を焼却する過程で多くのCO₂と有害物質が発生する。

このような方法は環境保護と言えるのだろうか？ スウェーデン政府はゴミの焼却による排気の九十九パーセントは無害であると保証しているが、環境保護団体は懐疑的だ。

「今はゴミ焼却という方法は確かにCO₂の総排出量を抑えることはできませんが、それ故に地球規模での補償制度を打ち出しました。支援活動を通じて工場から排出される温室効果ガスに対して補償するものです。すなわち実質的には当地区の社会福祉の向上や生物の多様性を護っているわけで、工場周辺の湿地は現地の生物の多様性を保護している一例で

す」とブリストタ永續部門主任のインゲラ・ロナーマークは窓の外に見える青々とした緑地を指して言った。

しかし、それだけでは終わらない。ゴミが焼却された後に残るのは無用の灰であるが、スウェーデン人はその灰をも捨てることなく、先端技術で灰の中から使用できる物質を取り出し、企業に販売して利益を上げているのである。

「再利用できる物は何でも無駄にしないのです。使用済み核燃料以外のほとんどのものを回収しています。家庭ゴミ、汚水、汚泥、廃棄溶剤、金属廃棄物など全てが会社の業務対象です」とラン

セル永續部門の責任者ラーシャンス・パーが説明した。

使用済み核燃料以外は 何でも回収する

この会社の営業項目は非常に多く、一般的な資源の回収から危険性を伴う廃棄物や注文生産した物の廃棄物などの処理全てを行っている。この会社のリトルグリーンマン商標はストックホルムの至る

●フォークシヨベルカーで積まれた大量の紙類は最終的には再利用される。



(写真 /SRV Srvatervinning)



●スウェーデンには3000基余りの風力発電機があり、全国の7パーセントの電力が風力で発電されている。2022年には再生可能エネルギーが総エネルギーの50パーセントに達する目標を立てている。

所で見ることが出来る。

「会社が回収する廃棄物は八百種余りに及び、それぞれの廃棄物は異なった技術で処理する必要がある。そこで会社は大量に技術開発方面に投資しました。そうして生まれた技術

一般的には肥料工場に送られ、農業に提供される。農

家で生産された農産物は消費者が消費した後、再び廃棄物となって廃棄物処理場とエネルギー工場に送られて処理や焼却が行われる。最後に残った灰から再び燐を取り出して肥料工場に売却され、もう一度、工程に入れられるわけである。

「ゴミが処理場に運ばれた後、作業員は性質の異なったゴミを分別し、異なった技術で処理します。例えば、低温処理技術で濡れた廃棄物を凍らせ、その後自然に融けるのを待つて使用できる物質を取り出すのです」とパーは解凍したゴミ

の一つが、イージーマイニング技術というもので、灰の中から燐と塩を取り出すことができます」と技術担当主任のパトリック・エンファルトが説明した。

燐は非常に重要な化学元素で、リン酸カルシウムやリン酸アンモニウム、塩化鉄、塩化カルシウムなどの化学物質を作り、飼料に使う添加物や肥料、石膏などの原料となる。イージーマイニング技術は廃棄される灰から燐を取り出し、生産工程で再利用することができるのである。例えば、鉱山で燐が採掘された後、

の山を指差した。

このヨーロッパ最大のゴミ処理場は各方面から持ち込まれる廃棄物を処理しており、その規模の大きさは驚くほどだ。処理場の役目は有害物質の処理や利用できる物質の探査だけでなく、一時的な貯蔵の役目も果たしている、とパーが説明した。廃棄物の中には今の段階では良い解決方法がないものもあるが、近い将来、新しい科学技術で適切な処理が可能になり、会社に利益をもたらすだろう、と彼は信じている。

今のスウェーデンはすでになりに完成度の高い資源回収を行っているが、環境

保護局はさらにゴミ税を引き上げること模索している。責任者のハンス・ラードは「これは大衆のリサイクル意識を高めるのに役立つはずです」と言った。環境保護局は政府と民間が積極的に協力し、環境保護政策を推進することで、生産者がより耐久性のある商品を作るよう奨励している。このほか政府は広告に協賛する形で、リサイクルの概念を宣伝している。「もし製品の使用年数が長くなり、含まれている有害物質が減るなら、それらのゴミを処理する時コストも下がることを意味しています」とラードが付け加えた。

廃棄物は今はすでに回収 (Recycle)、還元 (Recover)、再利用 (Reuse) を達成しているが、それではまだ足りない。人々が自発的に環境を尊重 (Respect) し、積極的にゴミを減らす (Reduce) ことができて初めて、人類は真に持続する未来を築くことができるのである。

この数日の間に見聞きして来たことを思い出しながら、私は飲み干したコーヒの紙コップをゴミ箱に捨てた後、ここから永續の旅が始まるのだと感じた。

捨てられた紙コップは回収、分解、焼却されて最後に灰になる。そして、灰になってから中に含まれている物質が新生

児のように再び発掘され、真新しい工程に加えられて循環していく。午後五時、退勤者と学生たちが自転車に乗って歓談しながら、規則正しく道を横切っていた。都市農業、地区建設、資源の回収からエネルギー工場まで多岐に渡っているが、ここにスウェーデン人の永續精神が見て取れる。スウェーデンは世界で最も環境保護に力を入れている国であり、エコロジーの模範であると言っても過言ではない。それは永續DNAがすでに彼らの心に芽生えているからである。

【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願 絵・林国新

人々の心が健康なら
地球も良い状態になる



気候の変動により災難が頻発している

大自然の風雨が順調になり

人類の生活が自然に回帰することを願う

人々の心の在り方が健やかであれば

地球の生態は良くなる

寒い冬が過ぎ去ると春がやってきて、色とりどりの花が咲き乱れ、多くの人が花見に出かけます。しかしながら人生の無常が突然訪れることがあります。

二月十三日に花見客を満載した一台の観光バスが、台湾中部の武陵農場で桜の花見ツアーを終えて台北へ戻る途中、ハイウェイで横転して三十三人が死亡、十一人が負傷する大惨事を起こしてしまいました。

救急隊員はただちに駆けつけ、夜を徹して寒い山で救助活動に尽くし、慈濟ボランティアは速やかに温かい生姜汁を作って隊員を労っていました。また亡くなった霊が安らかであるよう助念（死者の冥福を祈り八時間読経する台湾の風習）を行い、駆けつけた家族に寄り添って慰めていました。楽しみに

にして出かけた花見に一瞬にして大切な人を別世界へ連れ去られた家族の悲しみが思いやられます。ボランティアたちは夜明けまで斎場で残された家族に寄り添い、また一方では病院へ負傷者の見舞に行きました。

この突然の事故で多くの家族が悲しんでいる所へ、この世の菩薩がただちに現れ「人の傷に我痛み、人の苦しみに我悲しむ」心を以て寄り添い慰めていました。皆が戒を慎み敬虔な心を以て、この悲劇が再び繰り返されないように願っています。

すべての命を
平等に見て尊重する
愛を以てリレー式に
苦難の人々に関心を寄せる

バルカン半島にあるセルビアは、多くの中東難民がヨーロッパへ逃れる中継点ですが、各国の国境を越すには制限があるため難民は仕方なく当地に留まる以外に方法がありません。臨時収容所は狭く、人が溢れて通気が悪いうえに体を洗う水もありません。そんな劣悪な環境の中、全身をノミに噛まれるなど、難民の健康状態が心配です。

ヨーロッパ在住の慈済ボランティアは、昨年から支援活動を始め、今年の二月には七カ国のボランティアがセルビアに集まって、十日間着がえの衣類や食糧、洗濯機、乾燥機などを難民に配付しました。この寒い中にも温かい思いやりのあることと、彼らが基本的な尊厳を保って暮らせるよう願っています。

ドイツから来た范徳祿さんは、難民が病院に行くための車を一台、難民委員会に贈りました。セルビアで工場を開設しているインドネシア的林逢生さんは、慈済が難民救済をしていること

を聞いて、すぐに職員を派遣して手伝ってくれたのは大いに助かりました。林さんの職員は今後も続けて難民の支援をすると言っています。そして、ヨルダンとトルコの慈済ボランティアは、長期にわたって国内にいる難民に医療と教育の援助をしています。

このボランティアたちがすぐさま奉仕していたことは感謝に耐えません。苦難の淵にいる人たちにとって彼らは命の恩人です。

セルビアにいる流浪の難民は国外退去となるのを恐れてあちこちと逃げ回っているため、国際団体の援助を受け

ることができません。大雪の中、彼らの安らかな住み家はどこにあるのでしょうか？ 私たちが住んでいる台湾ではたとえ寒波に襲われても、温かい家に暖かい衣類、熱いお湯のシャワーがあります。彼らの一分一秒が難関であり、命を脅かされながら年月を越さなければならぬのは哀れです。

すべての命ある者は平等です。遠方で起きている災難は私たちとは何の関わりもないと思つてはなりません。無常の人生ですから、今ある貴い平穩は永遠の平穩を代表しているものではありません。人の苦しみを見て我が身の福

を知って警戒を怠らず、愛の心を發揮して苦難の人たちを身内の者と思つて関心を寄せねばなりません。

日々の平安に感謝し、お互いでも感謝し合い尊重と愛が心にあるとこの世は平穩になります。

清らかな本性を以て

誠正信実(まことしんじつ)に広く衆生(しゅじやう)済度(しゆど)を

《法華經・提婆達多品》の中に、文殊菩薩が四方教化から帰られて、智積菩薩との対話を行う場面があります。

文殊菩薩が大輪の千葉蓮華の上にお

座りになり、一方では海竜宮から靈山会へ帰る龍女と済度した同行の菩薩たちがいました。そして、蓮華の宝座と、

龍宮から出てきた人たちが一緒になつて、空中からゆつくりと靈鷲山へ下りてこられました。

ある智積菩薩は、大海中の龍宮は湿った所で、さらに水の中にいる者たちにはいろいろあつて教化することは難しいと思つていました。しかしながらこの莊嚴な様子を見て敬虔な心になり、文殊菩薩に「大智徳勇健。化度無量衆」と言つて、褒め称えました。それは勇猛かつ徳行を以て妙法華經を説き、無

数の剛の衆生を済度したということでした。

文殊菩薩は八歳の龍女を例に「智慧利根。善知衆生諸根行業。得陀羅尼。諸佛所説。甚深秘藏。悉能受持。深入禪定。了達諸法。於刹那頃。発菩提心。得不退転。辨才無礙。慈念衆生。猶如赤子。功徳具足。信念口演。微妙廣大。慈悲仁讓。志意和雅。能至菩提」と言われたことは、龍女は幼いながら道理に通じ、心身とも清らかで、慈悲心を以て衆生に利済し、なおかつ堅い精進の心を曲げることがなかったゆえに、速やかに證仏果を得られたのだと言わ

れました。

智積菩薩はまた一つ疑問に思っていたことを尋ねました。「釈迦牟尼仏は累世にわたって絶えず修行して成仏されましたが、龍女はなぜこんなにも早く證悟ができたのでしょうか」と。

その話がまだ終わらない中に、突然龍女が姿を現し仏陀に向かって跪き一礼して、仏の慈悲と智慧を褒め称え、自分も仏同様の大乘教法で各地の苦難の衆生を済度しますと言いました。

シャリフ尊者はこのことを聞いて不思議に思いながらも「穢れのある女身、法器に非ず」と言い、なおも女人には

五つの障害があるため、速やかに成仏することは困難だと言いました。

龍女は二人の賢者と他の人の思惑を知って、恭しく仏に礼をして宝珠を差し上げると、仏陀は喜んで受け取られました。その瞬間、龍女は男性の身に変わって南方に向かって行き、無垢の世界で成仏しました。

その時、皆は忽然として悟りました。もともと龍女は累生累世の六道の中で菩薩道を行っていたので、六度万行がすべて整って、歴劫が刹那に因果に変わって満ち足りたのでした。

この問答で衆生の偏見が解かれ、人々

には皆仏性が具わっており、「心、仏、

衆生の三つには違いがない」ことが証明されたのです。ただ貪恋、愛に捉われる心なく、清らかな慈悲、善に向かう堅い心、無欲無求であれば女子といえども大丈夫になることができるということです。

シャリフ尊者の言われた五障とは、多くの女性には無明と変わりやすい心、奢侈驕り、他人を感し嫉妬深く、煩惱などの習気があつて、修行するのに大きな障害になっていることです。龍女が仏に宝珠を差し上げたとは、すべての欲念を断つことを現しているのです

た。

提婆達多は仏法の道理に精通していたものの、煩惱無明などの障害が邪魔をして、嫉妬心や悪念が起こつて道行に背き、その上生々世々にわたつて仏に刃向かい、僧団を破壊したために活きながらに地獄に堕ちました。仏陀の「怨親平等（怨みがある者も親しい者もすべて平等という意味）」とは、しばしば提婆達多から攻撃を受けても変わらない堅い志で衆生を済度しておられたことです。

龍女が変身した後の成仏、また悪道の許すことのできない提婆達多に対し

ての授記とは、人々はみな等しく成仏

できることを説明しているのです。貪、

瞋、癡、慢、疑の五毒は真の本性を妨

げます。常に己を調伏して、法水を以

て煩惱や無明、塵を一つ一つ洗い拭わ

なければなりません。

誠正信実を心に抱き、誠意を以て衆

生に奉仕することです。正確な観念を

以て煩惱を断ち、堅く深い信心を以て

一切の法門を堅持し、菩薩の道を着実

に前進して、衆生の根基に応じて教化

すれば、この上ない仏道を成就するこ

とができます。

地球が平安なら

私たちも平安になれる

危機を抑えるには

私たちにも責任がある

中国の黒龍省に住む八十三歳の王金

華さんは環境保全のボランティアで、

大愛テレビの環境保全の番組を見て賛

同し行動に移しています。そして雪が

積もっていても資源回収に出かけてい

ました。

息子はこんな大雪に外出するのはよ

しなさいと母を止めました。しかし王

金華さんは、「資源は宝で、それに私は

この年だから一日やれば一日儲けたこ

とになる」と言って、大雪でも一日も

無駄に過ごしません。孝行者の息子と

嫁は母が一人でやるのが心配なので、

毎日つき添って回収できる物を集めて、

家の空き地を環境教育の場として開放

しています。

道を探し始めたら遠いことも厭わな

いことです。年末に王さんは息子夫婦

に付き添われて台湾へやって来て、「鉄

のような堅い意志で生々々法師に従

っていきます」と私に言った志に大変

感動しました。遠く離れて住んでいて

も、大愛の情は私たちの魂を結びつけ

ています。

彼女は台湾北部の慈済リサイクルセ

ンターを参観して、「地球が平安になる

と人も平安になる」と言い、台湾で見

た環境保全の経験を持ち帰って故郷に

定着させるのだと言いました。

気候の変動は年々激烈になり、世界

で絶えず発生している大雪、暴風、旱、

洪水、山火事などの天災の威力は驚く

ばかりです。人の力は天に勝るでしょ

うか？ 人類と大自然は須彌山と小さ

な蟻のようです。自分を大きく見ず、

謙虚に天を敬い地を大切にしなければ

なりません。

台湾に水不足が迫り、ダムの水が少なくなっています。生活する上で水と電気が不足するとすべてが停滞してしまいます。日常的に水を節約するだけでなく、菜食を行えば環境保護になり、地球温暖化を緩和させることができます。

四川省の実業家、紀亜紅さんは食品会社の社長で、三年前慈済の貧民救済の精神に感動して、昨年慈済委員の認証を受けました。彼女は工場の中に資源回収所を設置したり、従業員に菜食を奨励したりしています。

飲食もまた清潔が源であり、食物を口に入れる時、これは環境に優しいか

と気をつけることです。人は肉類を食べなくても生きられますが、五穀は不可欠です。野菜や果物をいっぱい食べることが、養生の道です。

小天地は大天地に影響します。皆が心を変えて、天を敬い地を大切にしていれば、生態を破壊せず、資源の消耗を低く抑え、一人一人の小さな力を集中すれば、天地を改善させる力を発揮することができます。

大地の風雨が順調になり、人類の生活が自然に回帰するよう願っています。人々の心のあり方が健康なら、地球の生態も良くなります。皆さんが心して精進することを願っています。

□ 静思語

【持ち場を守る】

それぞれ自分の持ち場で本分を尽くすこと。これがすなわち仏に学ぶことである。世の中にあつてただ漠然とし、自分がこの世に身を置いていることをなおざりにしてはならない。



髓

骨髓が結ぶ縁 生命の奇跡

台湾で造血幹細胞の型が一致するドナーを待つ白血病患者とその家族は、決して孤軍奮闘しているわけではない。台湾の国民が命のリレーに参加し、医療チームとともに命を救う使命を全うしているのだ。



造血幹細胞は骨髓や赤ちゃんの臍帯血、成人の末梢血中にあり、ドナー登録者は献血に似た方法で、末梢血幹細胞を提供する。患者の命のリレーである。骨髓の縁でつながった希望の道を、愛の心で次々バトンが受け渡されていく。



人は誰も人の子

家族への愛、生命や健康を求める心は誰しも同じです。
骨髄提供者と骨髄提供を受ける患者の間においても、
同じように共感と幸福を願う気持ちがあります。

◎文・李委煌 訳・高嶋由紀子 撮影・黄筱哲

英語教師の古小妮さんは、十年ほど前、台湾慈濟骨髓バンクにドナーとして登録しました。ところが、人を助けるより早く、二〇一一年、彼女自身が白血病を発症し、見知らぬ人の手助けが必要となったのです。

古さんは若い頃、香港から台湾の桃園に移住し、英語を教えていました。家族の世話と仕事に追われるなか、風邪による発熱だとばかり思っていたのが、実は急性リンパ性白血病だったとは思いませんでした。彼女は他の患者と同様に、健康を当たり前のことだと思っていました。今日帰宅して明日また仕事に行く生活が続くのだと思っていました。しかし、心の準備もできないまま仕事を辞めざるを得なくなり、未来があるかどうか



さえ分からなくなったのです。

そんな彼女を救うことができたのは私たち一人ひとりの力があつたからです。慈済骨髓バンクのデータベースのうち、血液の型が彼女と一致した若い男性が骨髓提供を承諾してくれたのです。治療の間、ドナーは手紙で彼女を励ましました。「我たちはリレーのチームです。私のバトンはすでにあなたに手渡されました。しっかりとそのバトンを握って走ってください。いつかバトンを次の走者に渡せるように」

健康を回復した古さんの血液型は元のO型から骨髓ドナーの血液型であるB型

に変わりました。今年五十歳になる彼女は、顔も知らない「前の走者」のことを常に思いながら、「次の走者」を探すことも忘れていません。慈済の骨髓提供啓発キャンペーンで、彼女は術後によりみがえった髪を触らせて、「骨髓移植を受けた私が、今はこんなに元気なんですよ！」と話す彼女は、愛をつなげていくために力を尽くしています。

道を探し人を見つける

輸血なら多くの人が経験しています。献血は広く受け入れられ、経済的負担や

健康への影響などを心配する人はいません。しかし骨髓提供となるとそうはいきません。普通の人たちにとって骨髓移植は縁遠いもので、どうやって骨髓を提供するのか、どんな病気を治療するのかなども知られていません。

造血機能がある骨髓の移植は、臓器移植の一種として扱われますが、臓器移植と大きく異なる点は、骨髓に含まれる造血幹細胞は自ら増殖して回復するということです。

愛の心は誰にでもあります。大切なのは、骨髓移植が一部の白血病患者にとって、生きるための唯一のチャンスだとさ

え言えるほど重要だということを理解してもらうことです。

台湾大学血液腫瘍科の徐思淳医師は、「化学治療が症状の緩和に効果があるうちに早めに骨髓移植ができれば、移植後の生存率は四割から六割に上がる」と語ります。

近年は少子化により兄弟間で型が適合する確率が下がっていることから、「非血縁者間造血幹細胞移植」の必要性が高まっています。幸いにも医療技術の進歩で、臨床例の統計によれば今では非親族間・親族間で治療の効果や生存率は大差がなくなってきました。昔のようにリ

スクが高く、「治療の最後の手段」としてやむにやまれず、という状況ではなくなってきたいます。

「昔は電車を乗り換えた後に道が分からないような感じでした」。徐思淳医師はこう例えます。今では移植技術も成熟し、「新幹線に乗ればすぐ目的地に着くという感覚です」と話します。

たとえ医療が日々進歩して移植治療の質が向上しても、社会の中に隠れている非血縁者のドナーを見つけないことには始まりません。骨髄移植への意識をいかに高め、ドナーを増やしていくかという点に、台湾慈済骨髓バンクと台湾全土の

慈済ボランティアは長年力を注いできました。

台湾慈済骨髓バンクは、華人社会では中国の中華骨髓バンクに次いで二番目、世界でも八番目の規模を持つ、命の希望のバンクです。血縁者間でHLA（ヒト白血球抗原）が一致しない患者に対して、非血縁者間の移植というもう一つのチャンスを作ります。今までに世界中の四千人以上の患者に移植を行ってきました。

世界のドナー登録者は二千九百万人を超えましたが、それでも世界の七十億人という人口のうち骨髄提供が可能な年齢層に対して、その割合は一パーセントに

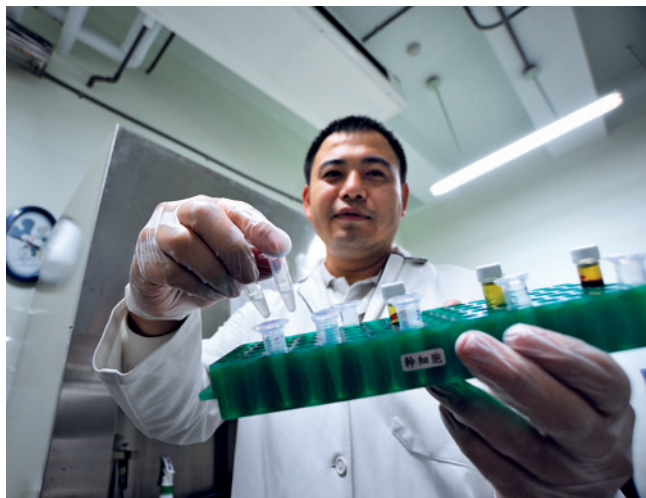
●ボトル内の10ミリリットルの血液サンプルは、ボランティアが走り回って宣伝、採血、データ化したもの。これが骨髄提供への勇気ある第一歩となる。今では毎年国内外の数千人の患者から慈済骨髓バンクに照会の依頼がある。彼らが待ち望んでいるのはこの希望と勇気、ドナーの愛の喜捨であり、この一つ一つが命の希望のデータとなるのだ。



もなりません。台湾慈済骨髓バンクには四十万のドナー登録者がおり、提供可能な年齢人口に対する割合は、世界の平均を遙かに超えています。

しかし台湾がこの栄光を維持するのは簡単ではありません。一般に五十五歳未満の人なら骨髄を提供できます。しかし、六十歳を過ぎると、その人はデータベースから「定年退職」します。一定の適合格率を持つドナーの数を維持していくためには新しい登録者が必要です。慈済骨髓データベースが設立以来二十三年間、たゆまずドナー登録希望者への採血、データ作成を続けてきたのは、まさにこの「新

●ドナー登録者の血液サンプルは慈済免疫遺伝子実験室のスタッフの手による分離、抽出、増殖、DNAシークエンシングなどの非常に精密な手順を経て、ようやく有効なデータが完成する。



陳代謝」を行うことが必要だからなのです。新しい血が入ってこないために古い血が滞り、骨髓データベースが萎縮してしまうことのないようにするためです。

慈済骨髓バンクはHLAの適合の精度が高く、事務管理の効率も良いため、最も適合するドナーを見つけて移植手術を成功させたいと考える韓国や中国といった海外の患者の主治医からも、しばしば協力依頼が寄せられます。

見返りを求めない利他的行動

骨髓ドナーの勇氣と喜捨の精神は、救

うすべのない命を救うことができます。慈済骨髓バンク医務主任の楊尚憲医師は、「非親族間の造血幹細胞提供は、『利他主義』の極致と言える」と話します。

しかしながら、ドナーと患者が提供と移植を無事終えるのは簡単ではないのです。台湾のドナー登録者が四十万人を超えていても、やはりドナーが見つからない場合があります。また、見つかったも様々な都合で骨髓を提供できないことや、患者が移植を待たずに亡くなるなど、非常に悲しい状況にも直面させられます。

二〇一六年、基隆の患者が十七人のド

ナー候補を見つけました。そのうち十三人は都合によりドナー提供ができず、残りの四人は血液の再検査の結果、HLAが完全に一致していないことが分かりました。

高雄慈済ボランティアの施明珠さんは、十年以上にわたりドナーと患者のケアサポートをしてきました。二〇一六年、四人の患者が無菌室で治療を受ける前に感染し、移植を一時中止するということがありました。患者たちは施明珠さんに対して「ドナーに申し訳ないと伝えてほしい」と繰り返したそうです。

施明珠さんは、患者は病状のせいで気

落ちしているだけでなく、骨髓ドナーに
対して申し訳ないという気持ちを抱いて
いることを知っています。また、時には
「ドナーが急に提供したなくなるのでは
ないか」といった心配も出てきます。
そのような焦りや苛立ちは、ドナーの造
血幹細胞が体内に注入されるまで続くの
です。

骨髓移植病棟で働いて十九年になる台
湾大学病院血液科の看護師の張喬芳さん
は、患者の多くがドナーの健康を気にか
けており、骨髓を提供したせいで体を壊
すのではないかと心配していると言いま
す。彼女はいつも患者に対してこう答え

ます。「心配いりませんよ。骨髓提供で
身体を壊すことはありません。ドナーが
様々な手続きに協力して造血幹細胞を提
供してくれるのは、ありがたいことです。
慈済のボランティアがお金を出して彼ら
のために料理を作り、栄養を補っていま
すし、ずっと採血で健康をチェックして
いきますから大丈夫ですよ」

また、患者はよく「いつドナーと『喜
びの対面』ができますか。あと何年待つ
のですか」と尋ねます。直接ドナーに感
謝を伝えたいからです。

日本では患者とドナーを会わせること
は決してありません。アメリカではよく

ニュースの生中継でドナーと患者との驚
きの対面が企画されます。慈済では、毎
年一回「骨髓ドナー喜びの対面の会」を
開き、患者とドナーが対面する機会を作
っています。

慈済ボランティアはドナー登録者、移
植を待つ患者の間の調整に奔走して「移
植の機会」を作るだけでなく、移植後も
長い間連絡を取り合って「対面の機会」
を作っています。手術前には命をつなぎ、
手術後には心残りを残さないためです。

造血幹細胞のやりとりという角度から
見れば、ドナーも患者も誰かの子どもで
あったり一家の主であったりします。で

すから肉親への愛情や生きたいと願う気
持ちは同じなのです。ドナーと患者の対
面イベントは、ドナーにとって、患者と
家族にとって、奔走したボランティアた
ちにとって、また社会全体に愛の心を育
む上で、特別な意義があるのです。

慈済骨髓バンクの楊国梁主任は、こう
話します。『喜びの対面会』の背景に
は、実は数多くの悲喜こもごもがあるの
です。助かる道のない失望とやるせなさ、
移植成功後のよみがえった喜び、対面会
を開き公開することで、社会の人々も私
たちの活動を知り、支えてくれることを
期待しています。

ボディビルダーが

大理石ベビーに出会った時

洪文彬 43歳 ジムインストラクター
黄彦銘 9歳 小学生

彦銘は移植後、順調に回復した。活発に動き回る善良で純真な子である。数年後、骨髓ドナーと対面した時、双方の長年の願いが果たされた。

◎文・李委煌 訳・済運 撮影・黄筱哲

い命の恩人にお礼を言いたくても方法がなく、心で感謝しながら、新たな命を吹き込まれた子供の養育に努めるだけだった。

台湾の別の所では、四十三歳のボディビルダー洪文彬が毎日のトレーニングに勤んでいた。ここ数年、国内とアジアのボディービルディングの大会に出場し、優勝を飾ったこともあった。八年前、彼は造血幹細胞のドナーとなったが、「誰に移植したのか？ その後生きているのか？」が彼にとって長年の「謎」だった。二〇一六年、突然「骨髓移植患者とドナーとの対面」活動への招待状が届いた。

造血幹細胞移植を受けた彦銘が発病した時は六カ月だったが、病氣と闘って八年が過ぎた。今は健康な可愛い九歳の男の子である。

発病当時、身長は六十センチ余りで体重は七、八キロだった。幸いにも辛い治療の過程は小さかった彼の記憶には何も残っていない。忘れるということは時には保護の役目を果たす。

彼が成長する間、両親はその事実を語ることはなかった。子供がすくすくと朗らかに育ってくればいいと思っていた。名も知らな

それは「命の接点」を見つけても面識のなかったドナーと患者にとつては、「天から落ちて来た贈り物」に等しく、双方とも面会できるこの日が来たことに信じ難い気持ちであった。

文彬はついに長年の懸念を払拭することができた。「相手は生きている！ 自分はその人を助けることができたのだ！」。彦銘の両親もまた、この世に自分の命を救ってくれた人があることを彦銘に知ってもらうために、活動に連れて行き、相手に感謝することを決めた。





●弱視の黄彦銘は敏感な手で触ることで、命の恩人が屈強な筋肉の持ち主であることが分った。

不幸と幸福

王馨黎は妊娠期間中、異常出血が続き、数カ月間の安静の末、幸いにも彦銘を生むことができた。

夫の兄弟姉妹には子供がなく、その子の誕生は両親にとって「金孫」だった。しかし、健康そうに見えた金孫は三カ月の時、眼球の小刻みな振動と肝臓、脾臓の浮腫みで入院し、検査したところ、「乳児性悪性大理石骨病」、すなわち俗に言われる「大理石ベビー」と診断された。「誕生の喜びも束の間、雲の上から谷底に突き落とされました」。少女時代か

らの憧れ、新婚の幸せ、そして子供が生まれた喜びは一瞬にして残酷な現実を引き裂かれ、落胆と涙に暮れた馨黎と夫はすぐさま子供を入院させた。医師は慈濟骨髓バンクでマッチングする相手を探すことを提案し、造血幹細胞移植が生存の唯一のチャンスであると言った。

早く移植を受けないと異常な骨は増殖し、骨細胞は正常な空洞状態から隙間のないほど密度が高くなってしまう。それは大理石のように硬くて脆く、子供の頭は大きくなっていく。

母親の馨黎はもう一人子供を産んで、その臍帯血を使つて彦銘を助けられるの



は大理石ベビーは六人しかおらず、彦銘はそのうちで最も若い患者だという。

ハラハラした百日間

病院では医療チームが二十四時間態勢で治療に当たった。退院してからは馨黎が一手に世話を担ったが、「毎日が挑戦でした」と当時を振り返る。移植して三カ月の間、彦銘は頻繁に嘔吐と脱水症状、救急治療、入院を繰り返した。「百日を乗り切ることができるかとても心配でした」。愛する我が子と将来のことを思うと、焦らずにはいられなかった。

馨黎は、苦勞して探してもマッチする人が現れない場合や誰か探し当てても寄贈しながらない場合もあることを知っていた。しかし、彦銘はそのような困難に

末梢気管支炎のため彦銘は毎日何回も嘔吐した。嘔吐する度に馨黎はシーツやかけ布団、衣類を洗濯した。その上、毎日壁や居住空間を消毒したため、手足の皮膚が赤く裂けてしまい、最後には雨靴を履いて家事をした。

「あの時期、スーツケースを出しっぱなしにしておきました。いつ何時入院しなければならいかもしれないからです」。スーツケースの中身は全て彦銘の衣類や必要品で、救急外来や急に病院

●視力障害のため、黄彦銘は学習や読書の時、顔を教科書やスクリーンにくっつけるほど近づけて初めて見えるのだ。（撮影・郭明娟）

に行く時に備えていた。

子供が生後わずか六カ月からほかの子供よりも勇敢な人生を歩み出したのだから、「私は息子よりもっと勇敢でなくてはならない」と馨黎は自分で自分を奮い立たせた。

ハラハラしながらも難関の百日を乗り切ることができた。馨黎はすぐに彦銘のリハビリ治療の予定を立てた。骨石灰症の患者は、往々にして神経が圧迫されて視力や聴力障害が起きる。移植手術を受けた時の彦銘はほとんど目が見えず、頭を一秒間もたげるのも困難だった。早期の集中治療と刺激を与えるリハビリでや

つと徐々に身体活動が増えた。

決断は正しかった

八年後の今、彦銘の両目の視力は弱く、顔を物にくっつくほど近づけないと、はっきり見えない。馨黎は彼により良い視力障害者教育を受けさせるために、台北で部屋を借りて学校に通わせた。一般教育と視力障害者向けの学習及び自立した生活能力を身につけさせた。

彦銘は病気で視力に影響が出たため、学習が少し遅れがちだったが、先天的な常人を超えた数字に対する感度と記憶力は傍目には天才と映った。

一家の大事な金孫が稀な病気にかった

ことで、子供の母親、また嫁として、馨黎は大きなプレッシャーを感じて来た。「もし子供が助からなかったら離婚してください」と彼女は夫とこんな約束をしたことがある。あの見知らぬ命の恩人は子供一人を助けただけでなく、その子の両親の婚姻をも救ったのだ。

ボディビルダーである文彬は引きしまった体と若い顔立ちに太陽のような笑顔を浮かべた人である。八年前、突然、慈済ボランティアから電話が来て、一人の患者とマッチングしたことを聞いた時は、以前骨髓ドナーの登録をしたことを

ほとんど忘れていた。

彼は十七歳の時、スポーツ中に座骨神経を痛め、しばらくベッドで療養したことがある。骨髓を寄贈するに当たり、妻も脊髄液を抽出する時に神経を損傷しないか心配だった。しかし、ボランティアが訪れて、造血幹細胞寄進の説明を詳しく聞いてから二人とも安心した。脊髄液を抽出するのではなかったのだ。

骨髓ドナーとなることを決めた時、文彬と妻は古い考え方を持ち、子供を護ることが最優先のお年寄りたちには、この事を話さないことにした。そうでないと、この人助けという善意に変化をきたすか



もしれないからだった。

鉄アレイが初対面の贈り物

二〇一六年十月十五日の初対面の日、彦銘と文彬の双方の家族は壇上で、諸々の出来事が一度に解決した。

文彬が目の前の子供を見た時、骨髓を寄贈した時のことを思い出した。すぐに造血幹細胞の必要量に達したのである。彼は相手が小柄な人か子供だと推測していたが、今日その答が出た。

馨黎は命の恩人の屈強な体格を見て、彦銘が移植を受けた後、比較的拒否反応

が少なく、体力の回復も順調で、朝から晩まで活発に動き、昼寝もしなかった理由が何となく分かったような気がした。

八年前、文彬は大林慈濟病院で造血幹細胞の抽出時間の最短記録を作り、彦銘も台南成功大学病院で最も若い移植患者の記録を作った。

体格が全く異なるドナーと患者は壇上では共に口数が少なかったが、席に戻ると打ち解けて話をした。来場する前、文彬は助けた相手がこんな小さな子供とは知らず、特別に三キロの鉄アレイを二つ選んで持ってきた。体が丈夫になるよう相手を励まし、初対面の贈り物にしよう

と思ったのだ。視力の弱い彦銘は顔を近づけ、文彬小父さんの筋肉を珍しそうに手で触った。

壇上でのやり取りを見ていたボランティアはとても感動した。長年の骨髓関係の仕事で数多くの人間性と情熱を見てきた。何度も危機を乗り越えて来た彦銘の両親も、骨髓ドナーとなって人助けすることに前向きだった文彬夫婦も、その後の人生で悔いを残すことはないだろう。

●造血幹細胞を寄贈した縁で、2つの家族に特別な血縁の家族関係ができた。写真左から黄彦銘の父親と母親、そして洪文彬と妻。



逆境に感謝しよう

いかなる苦しみや困難も堅い意志で克服すれば、ついに道が成就されます。

先日の早朝、證嚴法師は《法華経テイバダッタ品》の話をされました。テイバダッタは僧団の中ではとりわけ聡明活発でしたが、彼は自分の才能を見せびらかし、人気が仏陀より勝って人々から尊敬を受けられるよう願っていました。彼は僧団を分断させ党を組

◎文・釋德侃／訳・慈願

み、果てはアジャセ太子をそそのかして位を奪い取ったうえ度々仏陀に危害を加えていました。

テイバダッタは良からぬ心と行いによって、とうとう地獄に落ちました。しかしながら仏陀は彼のために授記をし、これを見た人々はこのような人間が成仏できるのだろうかと思問に思っていました。

「人にはもともと仏性が備わっており、例え悪人でも成仏の可能性があるので」と法師は話されました。仏陀がテイバダッタに授記されたことは「心、仏、衆生の三者に違いはない」という道理を明らかに示していると話されました。

テイバダッタが生々世々に互って仏陀に害を及ぼしたことに對して、仏陀が感謝したのは、それによって六波羅蜜が完全に具わり道を究めることができたからでした。『玉は磨かなければ器にならない』と言われているように、テイバダッタの鋭い



刀にも耐え、いかなる苦しみや困難も堅い意志で克服して、ついに道を成就されたのです」と法師はおっしゃいました。

法師はまた、釈迦牟尼仏が修行したことは自分自身のためではなく、天下の衆生が法を求めるためには、その身がどうなっても喜びであり、悔いはなかったとおっしゃいました。仏に学ぶ者は心して法を聴き、心の中の煩悩を改めなくてはなりません。煩悩をいかにして改めたかは、その動作や言語を見ると分かります。ですが、心にある無明をどうにか取り除いたとしても、自分が置かれた環境に影響を受けずに動揺しないでいられるでしょうか。これは試練を辿るほかありません。世の中の複雑な出来事に出会っても、心の中に法があれば、道理に合った行動で煩悩無明をことごとく取り除くことができます。「煩悩を取り除いてこそ、環境のままに悪業を造り、修行の道を行きつ戻りつしません」と法師はおっしゃいます。

法師は、寛大な心を持って人々に向き合うようお教えになりました。「他人の習気がどうあろうと、どんな過ちを犯そうと、広い心で受け入れて、憐れみ、恨まないことです。自分の煩悩無明を取り除けば、衆生を済度することができます」

餅を描くよりも作ろう

仏陀は過去世において宝海にお生まれになっても、その清らかな志は未来の濁悪な世界の中にあり、衆生済度を強く発願しておられました。法師は台湾北部の慈済人との談話の中で、現在の人心と貪乱な世界はまさに仏陀の言われた濁悪世界であり、人心を浄化しなければならぬ事態であると話されました。

「紙に描いた餅はどんなに綺麗に描かれていても食べることはできません。美味しいお餅を作って、必要とする人に贈らな



ればなりません。人心浄化も口先で言うのではなく、行動に移さなければなりません」

慈済の創立当初、どのように餅を作ればよいかも手探りで、竈があれば小麦粉を探し求めて練り餅を作って、必要としている人たちに上げていましたし、静思法脈、慈済宗門は口先で唱えるのではなく、実際の行動によって造り上げてきたのです、とおっしゃいました。

体が栄養を必要とする時は、自分で栄養物を口に運ばねばなりません。心霊も体験し成長させると、奉仕と善行を発心し、実際の行動に移すことができます。

仏教は人生の灯火ですが、煩惱は自分で取り除かねばなりません。法師は、ある人は仕事がよくできるが、習気が強いいため煩惱と無明を引き起こしていると言われました。「心して善事を行い、見返りを求めない奉仕をしても、もしも習気を改めな

ったら、日々の暮らしの中で煩惱が生じ問題を起こします。困難に出会っても恐れるには足りませんが、人心の不調は恐ろしいもので、調和がとれていなければ何事も成し遂げることは難しいものです。

仏陀は生々世々にわたって法を求め、常に修行し精進しておられました。法師は、「心すべきことは習気を取り除き、煩惱無明を心の中に取り込まないこと。法の意識だけを心田に植えつけるように」とおっしゃっています。

（慈済月刊六〇二期より）

煩惱を乗り越えて、菩提に至る



衆生は仏と同じように知恵を持っています。上人は早朝の勤行で、「仏の御言葉を信じ、仏の心と智慧を通じ合い、仏法を実行し、人々と良い縁を結びながら、衆生の煩惱の中にある菩提の種を見出すのです」とおっしゃいました。

煩惱は即ち菩提であり、群衆の中にあつてこそ清らかで素晴らしい知恵を見つけることができます。蓮の花が汚泥を栄養素として咲くように、群衆が修行の道場であり、衆生の煩惱は私たちを仏とならせる功德の源です。煩惱に染まらないようにするには、仏法の水で心の畑を耕し、心の中にある無明を希釈するのです。それによって、生と死の流れを渡りぬいて、衆生を知恵の彼岸へと導くことができます。

野菜を栽培する時、雑草は敵でもあり友達でもあります。雑草は野菜の成長を妨げることもありますが、完全に悪いものではありません。それを善用し、土の中に埋めれば、野菜にとって最高の栄養分になります。

これとは対照的に、心に芽生えた煩惱の草は心のゴミのようです。煩惱が心に根づいていれば、煩惱は絶えず複製されてゆき、ついには清らかな本性を覆ってしまふのです。煩惱は苦しく難儀なものです、悪い友ではなく、慧命えみょうの栄養分となるものです。それを利用し、乗り越えていくと、慧命の資糧となっていくのです。苦しみがなくなれば災難はなくなります。煩惱を断てば、菩提が見えてくるのです。

苦しいほど成就は大きいものです。苦しければより多くの感謝の心を持たなければなりません。感謝の気持ちがあれば智慧が生まれます。すべての人々や物事に対して、善を以て理解し、寛容であれば、自然に「どんな場面に対しても感情的にならない」と思えるようになります。善を行うにあたっても、思慮に欠けることなく、悪いことに遭遇しても、気にしません。考え方を換え、何事も自分から喜んで受け入れれば、煩惱を乗り越えることができ、菩提に至るのです。

慈濟大事記一、二月……………

訳・済運

01・24

中国江西省の12歳の女の子、陽雨は脊柱裂症と脂肪性脊髓膜膨張症及び先天性バドチャリ症奇形など多重症を患い、自立した生活を送ることができなかった。台湾と中国の慈濟ボランティアの協力の下、2016年9月から花蓮慈濟病院で治療を行い、今日退院した。

02・08	02・06	
フィリピン・マニラ市パラオ区で7日火災が発生し、2057世帯8500人余りが住む所を失くし、5カ所の避難所に収容された。慈済ボランティアは8日から10日まで慈済の移動調理車で被災者に昼と夜の食事を供給した。	中国上海市の慈済ケア世帯である呉曉冬はパーキンソン病を患い、父親は筋萎縮性側索硬化症患者で、一家は困窮した生活を送っている。蘇州慈済診療部門の協力で、呉曉冬は台湾花蓮慈済病院で治療を受けることになり、本日3人の上海慈済ボランティアの付き添いの下に病院を訪れ、治療が始まった。	帯が全焼した。慈済ボランティアは政府の福祉スタッフと相談し、本日、被災者に緊急見舞金と多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）を配付した。

02・04	02・03	02・01
ブルネイ・セリベガワン市の水上生活者集落で火災が発生し、26世帯が全焼した。	セルビア難民委員会は、難民キャンプでのノミの発生や食糧不足などの生活上の問題をヨーロッパ・慈済ボランティアに報告した。慈済セルビア難民支援ケアチームは2日から12日まで難民に着替用の下着と食糧を配付すると共に、洗濯機と衣類乾燥機、そして難民送迎用バスを贈呈した。	慈済フィリピン支部の楊国英執行長ら一行はマンダルヨン市のサンミゲル教会堂を訪れ、「世界カトリック教会主教会議・主教団多宗教朝食会」に出席し、各宗教の代表と慈済志業の理念や実践状況に関して意見交換を行った。

02・22	02・16	
	アメリカ・カリフォルニア州サンノゼ市で水害が発生し、慈済アメリカ北カリフォルニア支部と赤十字社が共同でジェームススリック高等学校に避難所を設置した。被災者の70%近くがベトナム系住民であるため、慈済ボランティアは通訳も務めた。	フィリピン・スリガオデルノルテ省で10日、マグニチュード6.7の地震が発生し、大きな被害をもたらした。マニラ、セブ、ザンボアガン、ボホールアイランドの慈済ボランティアは今日、被災地に視察に向かい、中長期的支援を検討した。
		けして事故現場と病院、葬儀場などで救助人員と被害者家族を見舞った。15日まで延べ3115人を動員し、55家族を見舞い、29家族に見舞い金を届けた。

02・13	02・12	02・10
13日夜、国道5号で武陵農場花見見物客を乗せたバスが横転する事故が発生し、慈済北区のボランティアは被害者支援に当たった。手分	慈済北区の実業家ボランティアはシリア難民を支援するため、2月12日に台北国際会議場で3回、「国際大愛心蓮に満ちた世界」と題した祈福音楽会を開き、社会大衆から愛の募金を募った。8375人が参加し、集まった募金は慈済国際災害支援に使われる。	慈済基金会は10日から26日まで高雄、台北、台中で「救済の達人！ 救済科学キャンプ」を開催した。18歳から35歳の社会で働く青年を招待し、災害を議題にした意見交換と災害支援の体験談を話し合い、防災と救済、気候変動、永續発展など公共の議題に関心を持つてもらった。



ヨルダンのザータリ難民キャンプで

ザータリ難民キャンプ周辺のテント区は物資が乏しく、生活はキャンプよりももっと困窮していた。空気は冷たかったが、自分のテントの前に立つ女の子。ボランティアが贈った新しいジャンパーを着ている。
(撮影・黄筱哲)

